講演録

明治という時代

——江戸の悲願と明治政府——

國學院大學法学部教授
水谷三公

はじめに

いまご紹介いただきました水谷でございます。きょうは、明治の前にある江戸と明治とがどういう関係になっているのかということを、どちらかというと、明治の中にあった江戸といいますか、江戸のほうから見た明治という時代を中心に、お話をさせていただきたいと思います。

お手元にレジュメのようなものがあると思いますが、「はじめに」は、三〇年、一五〇年、三〇〇年、四〇〇年となっています。あまり順序のいい数列にはなってないのですが、まず三〇年というのは、きょうお話しさせていただく明治は、時期としてはほぼ明治三十年ぐらいまでを考えているということです。これは、レジュメ最後の5のところで福沢諭吉と勝海舟の話が出てまいりますのとも関係がございます。レジュメ一枚目で福沢と勝の没年を見ていただきますと、勝が明治三十二年、福沢が明治三十三年に亡くなっております。政治・社会情勢などを考えましても、だいたい明治の二十年代の末ぐらいで、明治政府にとって、あるいは広く明治という時代とって、歴史に一区切りがついたのだと思っております。まあ、きりもよいので、明治三十年ぐらいで話を切らせていただきたいというのが、

最初の三〇年の意味です。

一五〇年のほうは、先ほどご紹介でもお話がございましたように、今年が明治天皇生誕百五十年ということでして、本来ならばきょうのお話の主題であるべきなのですが、幸いなことに、ドナルド・キーンさんと芳賀徹さんが、「明治天皇とその時代」ということで十一月にお話になられる予定になっているのだそうです。すぐれたお二人がお話になるので、明治という表舞台で活躍された方々のお話は、このお二人にお任せして、私のほうはもうすこし舞台裏といいますか、裏方の話を考えてみたいということです。

それから三〇〇年と申しますのは、ちょっと説明が必要かもしれません。きょうの話は明治三十年ぐらいまでというつもりなのですが、明治のなかの江戸ということを考えますと、一八八九年、明治二十二年の八月に東京開市三百年祭、東京に市が開かれて三百年になるという記念のお祭りが行われておりますことが注意を引きます。この開市三百年祭というのは、旧幕臣たちが中心になって挙行した催しのことであります。当初は明治政府に華々しく抵抗し、そのあと明治政府で偉くなった榎本武揚が委員長になっております。東京開市というのはちょっと変な話でして、三百年とは何を祝っているかというと、天正十八年八月の徳川家康のいわゆる関東御内入り、徳川が江戸に移ってくる年を記念しているわけです。これは西暦ですと、一五九〇年になります。ところで、明治二十二年というのは一八八九年で、これはどうも数えのようで、数えで三百年になっている。この三百年を祝ったわけです。

ちょっと変だと申し上げましたのは、江戸開市三百年と言わないで、東京開市三百年と言っている点に関係します。旧幕臣たちが集まって、江戸が開かれたのを記念する会なのですが、この時期ではまだ江戸ということ、あるいは徳川ということを公式に表に出すことをはばかる雰囲気が榎本らにはあったようです。天正年間に東京はないわけですが、それをわざわざ東京開市と言い換えたのは、やはり、明治政府に対してはばかるところがあったのだろうと思われます。きょうの話と関係するわけですが、江戸というものを明治になって表面に押し出すということに、なお若干

のためらいがあった。そういう時代雰囲気がまだ明治二十二年にはあったということが、この東京開市三百年祭というネーミングに表れているのではないか思われます。他方で、この催しが開かれたこと自体、明治も二十二年くらいになりますと、江戸を回顧する、あるいは江戸を再評価するという動きが力を増していた事情をも物語っています。その動きが一つの頂点に達するのが、日清戦争を経た明治三十年ごろであろうと考えます。それで、きょうのお話の三〇年という区切りと時期的に重なってまいります。

そして、これもまたご案内だろうと思いますが、来年は江戸開府四百年記念の年だそうです。江戸・東京四百年というふうに普通言われているようですが、来年、二〇〇三年は江戸・東京四百周年の記念行事が行われます。ご案内のとおり、一六〇三年（慶長八年）に徳川家康が征夷大将軍に叙任されて、いわゆる幕府を開いてから来年で満四百周年になります。もっとも江戸開市三百年流の数えでいきますと、今年が四百年になるわけです。ともかく今年は、長い歴史で見ると、いろいろな節目、きりのいい年が回ってきているということもあります。そんな事情がございますので、明治という時代を考えるうえで、江戸というの時代はどういう意味を持っていたのだろうか、明治の政府あるいは明治の世界にどういう影響を与えたのだろうかということを考えてみたいというのが、きょうお話しさせていただく骨子といいますか、大筋の考えでございます。

一、維新と滑らなかった「革命」

早速、次の1「維新と滑らなかった『革命』」にまいります。これもやや奇妙な表題になっておりますが、意味はこういうことであります。明治という時代を、日本の長い歴史のなかで考えますと、その功績の第一に、初めて近代国家をつくったことがあげられるだろうと考えます。日本史上最初だっただけでなく、ヨーロッパ世界の外で近代国

家の形成に成功したのは、十九世紀には日本だけだったというのが大事な点なわけです。あとでもちょっと申しますが、東北アジア儒教文化圏でも、あるいはその他の地域でも、近代国家の形成には二十世紀に入るまでに成功した国はほとんどありません。そもそも、二十一世紀の今日ですら、近代国家形成に成功した国が、ヨーロッパ世界の外に、どれだけあるか議論は残ると思います。いま国連に加入している国が百九十一か二あると思いますけれども、その中で、本当に近代国家と呼べるような国がいくつあるだろうかということを考えてみますと、明治が近代国家というものを非常に短期間で離陸させたのは、たいへん大きい功績だったといわざるを得ません。これが日本史から見て、明治の傑出した功績だったという評価は動かないところでしょう。

そういうわけですから、明治国家を指導した人々、明治天皇以下、大久保利通とか木戸孝允とか伊藤博文とか、そういう人々に即して明治時代を考えるという説明の仕方もあるわけですし、それはそれで妥当だろうと思います。ただ、明治の元勲たちや官僚たち、そういった人たちの努力だけでことが順調に運んだわけでもないのも否定できないところです。明治が無からすべてを創り出したわけではなく、その前にあった江戸というものが、明治国家の形成にたいへん大きい役割を果たしたわけですから、今日は明治のなかの江戸という問題に重点をおいて考えていきたいと思います。

まず近代国家をつくると簡単に言いますけれども、近代国家をつくるためには、それまであった古い体制を一回清算しなくてはならないという問題があります。いわゆる「文明開化」でもあるわけですが、これがなかなか大変なのです。いかに大変かは、戦後たかだか五十年ぐらいの間にたまった既得権益を清算するとおっしゃって、首相の小泉さんがここ一年余り、いろいろ努力されているのをみてもわかります。小泉さんによると改革は着々と進んでいるのだそうですが、実際問題として、自民党をぶっつぶしてでも改革をやる、つまり既得権益の清算をやると小泉さんが言われても、なかなか進まないわけです。

それが江戸時代、二百五十年以上にわたって積み重ねられてきた既得権益の体系、つまりいわゆる「幕藩体制」（私は江戸体制と呼ぶほうがいいと思っていますが）の重みは、想像を絶するほどものすごいものだったと思います。親子代々、三河以来の旗本であるとか、直参であるとか、幕臣たちは自慢するわけです。実際にそれで何を言っているかと言いますと、二百五十年間ずっと自分の一家の権益を守ってきたということにほかならないわけです。もちろん徳川だけでなく、同じような事情は各藩それぞれにもあるわけです。つまり、二百五十年にわたって既得権益が積み重なっているのに対抗して、それをチャラにしないと、新しい近代国家はできないわけです。そうでないと、武士はいつまでも武士、藩はいつまでも藩、将軍はいつまでも将軍ということになりますから、これでは近代国家のつくりようがなくなります。したがって、新しくつくるためには、一回既得権益をチャラにしなければならないという問題があるわけです。

ところが、これは言うは易く、行うは非常に難いことは、先ほど申し上げましたように、小泉さんがいくらやられてもなかなかうまくいかないところからも想像していただけると思います。つまり、二百五十年にわたって積み重ねられた、あるいは戦国から数えれば、数百年にわたって積み重ねられた既得権益をどうやって清算していくかという気の遠くなるような課題があり、それを清算しないと、一国がもたないという切迫した危機感が他方にある。これが幕末の時のいろいろものを考える人々の共通の認識だったのだろうと思います。そういうことを多くの人たちがおぼろげに感じ、考えていたに違いないのですけれども、つきつめた議論が増えるのはやはり幕末です。お手元にお配りした二枚目の資料の1の(ア)を見ていただきたいと思います。

既得権益の清算には理屈だけでは無理で、結局は、武力行使が不可欠だと認めた一人が富田鐵之助です。この富田については、『忘れられた元日銀総裁』という吉野俊彦さんがお書きになった本をお読みになってご存知のかたも少なくないと存じますが、明治になって、形式上は二代ですが、実質上は初代日銀総裁になられた方であります。出身

は仙台藩で、重臣の家の四男として生まれました。

一枚目のレジュメに幕末・明治在世略記というのを載せておきましたが、真ん中からちょっと下、福沢諭吉の下が富田鐵之助であります。天保六年（一八三五）に生まれております。ですから、福沢とほぼ同い年で、実は福沢とも面識があって、仲がよかったようです。一歳しか違わないということのみではないのですが、福沢のことは友人の一人、福沢君と呼んでおりました。この富田鐵之助は、幕末の気運に駆られてヨーロッパの軍事、兵学を学ぶために、勝海舟の私塾に入っております。勝海舟はいちばん上に載せてありますように、文政六年（一八二三）の生まれで、維新の年が数えで四十五歳です。幕末に活躍しているときがちょうど三十代の後半から四十代の前半という男盛りで、富田は東奔西走していた勝の弟子に入っております。富田が後に書き残した記録を読みますと、勝についてのみは、常に勝先生というふうに陰日向なく先生と呼んでいます。福沢にも親しく、勝には師事し、当時としては見識の高かった人物の一人でしょう。

勝の息子の勝小鹿というのがいるのですが、慶応三年（一八六七）に勝海舟が小鹿をアメリカに留学させるときにも、富田を見込んでその付き添いにつけています。富田は勝さんの息子に付き添ってアメリカへ勉強に行くわけですが、行くとすぐ、日本はてんやわんやの幕末になります。そして、慶応三年（一八六七）の冬に徳川慶喜が大政奉還を言い出し、そのニュースがアメリカにいた富田にも届きます。富田がアメリカにいて話を聞いた感想を述べた手紙の一節が、(ア)に引いてあるものです。「皇国内一ト先戦地に陥り候上ならてハ　弊事之改正より善美を蓋し候事ニ者相至リ申間敷」うんぬんというふうに書かれています。西洋暦で六八年二月二十九日、日本の暦ですと、慶応四年正月二十六日。ご案内のとおり、慶応四年正月三日の鳥羽伏見の戦いで、いわゆる戊辰戦争が始まる。そういう時期であります。これは、お読みいただくとおわかりいただけますように、従来のいろいろな弊害、制度を改正して立派な制度を立てていくためには、いったんは日本国も内乱になる以外にはなかろうという考えが明瞭に述べられています。

戊辰戦争では仙台藩は朝敵に回りまして、仙台藩の家老が切腹するということで敗戦処理を済ませております。ちなみに、富田が手紙を出した大童さんというのは、幕末の仙台藩の江戸留守居役でして、本当の朝敵は大童であるというので、明治になってだいぶ困った話がありまして、福沢さんがいろいろ駆け回って助けたという話が『福翁自伝』のなかに出てくるので有名な方であります。ともかく、武力行使で既得権益は清算しなければならないという意識は、新政府の側には当然ありましたが、朝敵になった仙台藩の人の中にも同じような考えはあったことが注目されます。

戊辰戦争は、奥羽越列藩同盟などの抵抗もありましたが、半年ほどで一応片づくわけで、内戦としては比較的短期間に終息しています。しかし、武力行使によって政権が移動したという事実は否定できないだろうと思われます。維新が「革命」である事情は、いろいろな人が言っているわけですが、一つだけ挙げますと、これもお手元資料の2に紹介させていただきました池辺三山がおります。池辺は明治にジャーナリストとして活躍した人で、なかなか立派なことを書いているのに文壇で認められないのは残念だと、夏目漱石なんかはだいぶ買っていた人です。「朝日新聞」の論説記者で、のちにフリーランスのジャーナリストになりますが、これが(イ)で言っているのが革命論の一例であります。わざわざ引きましたのは、革命のことを欧米流に「レボリュウション」と呼んでいる点が面白いからでもあります。フランス革命などとの比較が念頭にあったのでしょう。ともかく、維新の原動力は兵力にあって、それでレボリュウションができあがったと言っているわけです。

ただし、すべての人が、戊辰戦争を含む明治維新を革命と見るかといえばそうではありません。それは革命をどう定義するかしだいで変わります。例えば講座派と通称されるマルクス史家は、明治維新はブルジョア革命としては不徹底で、封建的な要素が清算されずに後に持ち越され、それが日本社会のゆがみや立ち遅れの原因になったという見方をしていました。実は、私の恩師のお一人で、お亡くなりになりましたが、丸山眞男先生も、明治維新ではもっと徹底した市民革命が起こるべきであったという含みのことを言われたことがあります。私個人はそういう解釈に少し

疑問なのですが、このような不徹底な革命という解釈をさらに突き詰めたのが(ウ)であります。バリントン・ムーアというアメリカの研究者が、『独裁と民主政治の社会的起源』という本を書きまして、そのなかで明治維新は革命ではなかったという議論を展開しています。それによりますと、「日本の政治・社会制度が資本主義の諸原則に適応できたため、日本が近代に突入する際に、革命という犠牲を払わないですんだ。日本がこの初期の恐怖を免れたことが一因となって、日本は後にファシズムと敗戦によって打ちのめされることになった。(中略)革命を回避して近代に入る代償は、きわめて高くつく」というふうにムーアは言っています。

アメリカの学者というのはわかりやすいことはわかりやすいのですが、必ずしも十分納得できるとは限らない場合も多いように思います。このムーアさんのご託宣も若干疑問で、なぜ疑問かはあとで多少説明いたしますが、明治維新がある種の武力行使を伴った政権変動があったことまでは否定できないように思います。

そういうふうに武力行使で政権変動が起こりますと、なかなかそれだけで事が終わらないという問題がつきまといます。実は、きょうお話しさせていただくためにあちこち調べ直してみたのですが、結局見つからなかったので、そこにはご紹介できないのが残念なのですが、作家だったか、学者だったか、官僚だったか、それも忘れましたが、ある日本人が、ヨーロッパからロシア・シベリア経由で帰国途上、たまたまロシア革命に遭遇し、現地でなりゆきを観察することになりました。そのかたが日本に帰られてからだと思いますが、ロシアはどうだったと聞かれて、一言、「革命は滑る」と言われたのだそうです。この話は今から二十年ぐらい前に読んだと思うのですが、さて、どこで読んだかとなると、整理が悪くて、なかなか出てきません。出典を示さないでたいへん恐縮なのですが、そういうことを読んだのは事実でして、なかなかうまいいいぐさだと思って、記憶に残っております。つまり、革命というのは、当事者たちの意に反して滑るんです。

どういうことかと申しますと、私も若い頃、大学で下っ端の助手をやらされておりまして、そのとき革命ではあり

ませんが、大学紛争、学生紛争に出会いました。大学紛争がどんどんエスカレートして広がっていくのをずっと見ておりましてた。いろいろな現場に行って見ていたので、あれは大学のスパイじゃないかとか、反対派のスパイだろうとか、いろいろ言われて、リンチに遭いそうになったこともあります。好奇心は猫をも殺すという教訓ですが、ともかく好奇心が強かったものですから、懲りずに観察を続けておりました。だんだん混乱してくると、一番過激な主張する集団がリーダーシップをとるようになり、運動全体を引っ張っていく傾向が強くなっていきました。最初は大学の中の改革運動で始まったのが、安田講堂の攻防戦に発展し、最後はあさま山荘事件とか大菩薩峠事件に行き着く、そのうえ飛行機を乗っ取って北朝鮮へ行くというご苦労なことになってしまうわけです。ともかく、事態が混乱し、暴力行使の比重が増えると、すべるようになりやすいのは、学生紛争も例外ではありませんでした。

何が革命かどうかの議論はともかく、いったん大規模な暴力行使に手を染め、暴力によって政治変化を起こそうとし始めますと、それが習い性になってしまう可能性が非常に高まります。その結果、事態はどんどん滑ってしまう。これは、ロシア革命のあとのスターリン支配とか、中国革命のあとの毛沢東支配とか、現下問題になっている北朝鮮とか、ともかく十九世紀、二十世紀の革命を見ていますと、思わず滑っていく事情がわかります。その結果、大きな社会的混乱と人的、物的な犠牲が発生するようになります。ムーアは、革命が必要で、革命のできない社会はだめなんだと言っているのですが、たとえそれがすこしは当たっているにしても、いったん革命が起きると、そのあと予測がつかないような大変な事態が連鎖的に起きてしまう。つまり、滑ってしまって、最後は過酷な独裁や粛清でもやらなければ収拾がつかないような事態にまで行ってしまうことをどう考えるかという問題は残ります。たとえば、ロシア革命が達成したとされる成果と、革命によって失われたものとの損得計算をやったら、たぶんこれはそろばんが合わないのではないでしょうか。たとえばフランス革命から派生した「自由・平等・博愛」の理念が、世界共通の理念となったことを例に、もっと長い目でみれば革命の意義は大きかったという議論もあるのですが、革命がなければこ

れらの理念が求めた実質的な成果が生まれなかったと言い切れるかどうか疑問です。

そういう点から見ますと、明治の非常に重要な点は、必要最小限度の革命で、極めて大きな果実を手にしたという点にあるのではないでしょうか。同じくアメリカの研究者でも、トマス・スミスのように、明治維新とその後の変革は「一七八九年の大革命がフランスにもたらした変化より、大きな変化を日本にもたらした」と考える方もおられます（『日本社会史における伝統と変化』）。私の印象もこれと似ていると言えると思います。

では、なぜ明治は必要最小限度の政治革命で済ましえたのでしょうか。つまり、今日ふうに言いますと、力で行政改革をやってしまったみたいなものなのですが、それだけでうまく止まったのはなぜだろうかという問題になります。暴力連鎖の拡大が止まったことに、明治が短期間でうまく近代国家に離陸できた最も重要な原因があって、維新の大混乱が長引いたら、近代国家どころではなかったろうと思います。それは今日でも各国でいろいろなことが起こって、内乱が続き、内戦が激化する。そのために、なにはともあれ、民衆が苦しむというのを見ていれば、よくわかるわけです。

その点は明治を生きていた人は非常に自覚的でした。たとえば(エ)に引いた福沢諭吉の意見があります。さきほども触れましたように、明治二十七年というのはなかなか意味のある年なのですが、この年福沢は、「古来各国の革命に、一旦その国を平治しても、先代の与党は容易に消滅せずして再挙を謀らざるはなし」で始まる文章を書いております。その趣旨を今の関心に沿って要約しますと、革命を起こすと、既得権益を奪われてしまった人間が大量に発生する。そういう人々は力づくで自分たちの正当な権利を奪われたわけですから、当然頭にきて反革命というか、抵抗運動を起こすはずのものである。ところが、ここにたいへん不思議なことがあったというわけです。明治維新でいちばん既得権益を奪われたのは、なんといってもそれまで政権を持っていた徳川家の家臣団でありますから、そのなかから反乱を起こすような人間が出てきてもよさそうなものなのに、そんなことはまったくなかったというわけです。「幕府

恩顧の士民多き其中に、旧政府の為めにとて嘗て一夫の再挙を企てたる者もなきのみか、陰にも陽にも之を談じたる者さへあるを聞かず、一気呵成の新政府を視ること、百年来の習慣に慣れたるものの如し。奇なりと云うべし」というのはおおよそそんな意味でしょう。

明治政府は戊辰戦争で勝って政権を握った。これをなんとかひっくり返そうとする動きを、幕臣が一切見せていない。見せていないのみならず、ひっくり返そうと言う人すらいない。これはちょっと変じゃないかと。『痩我慢の説』などから見ましても、福沢はちょっと苦々しい顔でこれを言っているように思うのです。とにかく、事実問題として、旧幕臣たちが新政府の転覆計画を企てたこともなければ、議論したこともない——議論したこともないというのは重要だと思いますが——のは、たいへん奇妙なことであると福沢は言っているわけです。

福沢よりはすこし若い世代に属しますし、先ほどご紹介のありました明治天皇に近い一人に、牧野伸顕がおります。大久保利通の次男で牧野家に養子に行った人で、のちに昭和天皇の側近として仕えられて、その日記、『牧野伸顕日記』は、われわれが大正から昭和の天皇を知るうえでたいへん貴重な資料の一つになっています。この牧野さんが『回顧録』を書かれています。なかなかおもしろい本だと思いますが、牧野さんは『回顧録』の中で、言葉づかいが似ていますから、これはたぶん福沢の『維新以来の政界の大勢』というのを読んだうえでの議論だろうと思いますが、こういうふうに言われています（これは戦後になって話をされたものを、起こされたものです）。

「幕府の与党とか、徳川方の潜伏せる不平分子の行動は函館戦争で根絶し」、函館戦争というのは榎本武揚が五稜郭に立て籠もって明治政府に抵抗した戦争のことですが、「函館戦争で根絶し……その後幕府側の旧勢力は明治政府に何の煩いもかけなかった。これは勝らの進言に基づく徳川の慎重な態度、また新政府の当局者の思慮ある取り扱いによるものであるが……歴史家が当時の史実の研究を遂げて、正確に後世に伝うべきことだと思う」と言っています。

牧野は大久保利通の子で薩派ですから、薩長政府のもとで出世を遂げています。藩閥政府とは距離をとった福沢と

は異なった立場に立っているわけですが、旧幕臣たちが動かなかったということは大変に重要なことであるから、後世の歴史家はよくそれを研究して伝えるべきであると言っているのは、事実認識の点では福沢と共通するところがあります。牧野さんが歴史家に出されたこの注文におこたえするような話になるかどうかわかりませんが、牧野さんが言われたことの先を少し考えてみたいというのが次の話であります。

二、国際環境

3に入ります前に、ごく簡単に2の話をしておきます。これからの話は主として日本国内の話に限るわけですが、なぜ革命が滑らなかったかということのもう一つの重要な原因は国際環境にあります。西郷隆盛が、当時のイギリスと日本との主要なパイプ役であったアーネスト・サトウから、もし薩摩が倒幕に立つなら武力を貸そうかと言われたときに、申し出を断ったという有名な話があります。日本側が自分たちの争いに外国の勢力を引っ張り込まなかったということが、内戦を考えるうえでたいへん大きいわけです。どこの国の内戦でもそうですけれども、列強間の代理戦争になりますと、戦争は国内で行われているのですが、決定は外国で行われるということになりやすいわけです。その結果、国内はむちゃくちゃになってしまって、収拾がつかなくなります。これはアフリカ・中近東なんかで、かつてソ連とアメリカの代理戦争があって、現地がむちゃくちゃになってしまうという状況と似ているわけで、それが避けられたというのが大きかったと思います。

それを避けられたのは、一つは日本人の側の自制ということもありますが、当時の日本の地位に関連した問題も重要です。たとえば当時のイギリスは日本に積極的に干渉するつもりがありませんでした。サトウがいくら言っても、イギリスの外務省には、日本に本格的な武力的関与を行うつもりはなかったと思います。当時のイギリス外務省文書

を見てみるとわかりますが、口ではいろいろ脅かしていますけれども、本格介入する気はありませんでした。もう一つ問題になるのはフランスです。フランスはちょっと色気があったわけです。幕末にフランスは徳川にはっきり肩入れする動きを見せましたし、これに呼応する動きが日本側の一部にあったのも事実でして、一時はフランスから金を借りて薩長をやつけようという気分も高まっています。結局、フランス側の事情でこれが流れてしまったわけですから、日本の自制だけでは説明できない部分も少なくありません。つまり、歴史につき物の偶然・幸運というものも考えておく必要があります。

また、当時の中国と比べますと、日本に市場としての魅力が乏しかったという事情もあったようです。日本はかつて世界有数の産銅国でしたが、江戸期に売り尽くしていますし、当面輸出できるのはせいぜいお茶と絹ぐらいですから、どうしても日本を武力で手に入れようという経済的な誘因が乏しかったのも否定できません。中国で手いっぱいだというのがヨーロッパ列強の偽らざる気持ちで、日本に本格的に介入するつもりはなかったし、そこまでの魅力もなかったというのが大筋の事情のようです。ただ、それはあとになって言えることでして、当時の日本側は、下手をするとヨーロッパ列強に侵略されるかもしれない、ひょっとすると植民地化されるかもしれないという心配は大きくて、非常に緊張していたのも事実です。つまり、外圧ですね。外圧の意識が非常に強かった。

人間というのはみんなそうですけれども、適度に脅威、外圧、競争というのがないとだめになりやすいわけです。ちょうど幕末の時の外圧は、なんとかしなきゃいけない、何かをしなきゃいけないと思い込むほどほどには強い外圧でした。ただ先ほど触れた事情もありまして、打ちのめされちゃってどうにもならないというほどの危険はなかったように思われます。それが、レジュメの2の国際環境のところに書きましたが、「ほどよいガイアツ」ということの意味でして、これが近代国家形成の推進力にもなりました。

歴史は繰り返すと言われることがありますが、七世紀から八世紀に日本が律令国家を形成したのも似た事情があっ

たようです。ちょっと興味がありまして、ここ一、二年古い時代のことを勉強しているのですが、七、八世紀になぜ日本が律令制を導入したかという問題があります。これにもいろいろな説明の仕方があると思うのですが、最終的には国際環境、外圧の問題が大きかったと思います。比喩としてはすこし変ですけれども、私どももだんだん両親が年とってきますと、スープの冷めない距離と言います。いくら恩のある両親とは言っても、年がら年中ぴったり密着して同居されると、若干煩わしい。しかし、あまり遠く離れていても心配になる。そこで言われたのが、「スープが冷めない距離」でして、そのくらいのところに身寄りの年寄りが住んでいるのがいいということのようです。このたとえを借りますと、日本は大陸との関係で、スープの冷めない距離にいたということになります。つまり、朝鮮半島ほど近すぎて、火傷をするほどではないけれども、スープが冷たくさめて飲めないほど遠くはないという距離にいたことが、歴史を調べてみればみるほど、日本の社会や国家を基本的なところで決める重要な要素だったと思います。そして、この同じ事情が、「程よい外圧」を生み出す環境条件でして、幕末から維新の時期には、これが欧米とのあいだで繰り返されるのではないかと思います。

三、島国の戦争と政治

具体的にそれがどういう意味をもっていたのか、それが明治維新とどういうふうにかかわるのか。これが3の島国の戦争と政治という話です。資料の二枚目の3の(ア)をご覧ください。3にご紹介させていただいたのは、アラン・マクファーレンというイギリスの歴史人口学という分野の学者の議論です。日本とイギリスを比較して、両国の人口と経済発展の問題についてかなり長い時間の幅で調べ、議論しております。大変分厚い本でして、いろいろおもしろいことが書いてありますが、まあ三分の一程度に圧縮してもらえればさらに良かったように思います。ともかくその本

の中で、島国の戦争について興味深いことを言っています。全文を紹介しますと長くなりますので、だいたい要点だけを申します。

「戦争は通例、農業や社会の破壊とそれに続く飢饉と疫病によって、直接の戦争によるよりもはるかに多くの人間を死に至らしめる」。ところが、日本と英国では、こうした戦争自体が少なく、発生した戦争も、宗教などを同じくする人間同士の戦いで、穀物や動物の大々的な破壊や略奪にいたることはまれだった。獲得すべきものは権力であって、略奪品にはない。支配者になろうとする者は、将来の臣民やその生活基盤を滅ぼすことに利益を持たない。両国の戦争は、実際被害を与えないような戦略ゲームである。イングランドと日本に重大な戦争がなかったことは、両国の特異な発展の中心的理由であり、それは島国という偶発的事情による。

以上がマクファーレンが言っていることの要点です。私の好きな評論家で、もうお亡くなりになりましたが、山本七平さんという方がいらっしゃいます。山本さんの『私の中の日本軍』というご本は、戦後書かれた最も優れた日本論の一つであり、優れた戦争論でもあると思いますが、この『私の中の日本軍』を読んでもわかりますし、だいたい戦争に行かれた人はみなさん言われることですが、戦場というのは非常に退屈なものだというのが一つ、非常に腹のへるものだというのがもう一つです。言い換えますと、ほとんど戦争について、銃撃やら爆撃で亡くなる方よりも、食料不足やら疫病やらで亡くなる数のほうがはるかに多いのが実態のようです。とりわけ日本がアメリカと戦った戦争はそうでした。本当にお気の毒だと思いますが、ジャングルやなにかの中でマラリアにかかり、食料もなく、多くの方々は敵の顔を見ることもなく亡くなっています。日本の戦争だけでなく、敵に殺されるよりも、いわば戦争に伴う二次被害のほうがはるかに大きいというのが、ほとんどの戦争に共通の問題です。

私どもも若いころ、戦場というのは新聞記者が去ったあとが大変なんだという話を聞いたことがあります。要するに、戦争が派手でドンパチやっているときは特派員とかが来て、これは命懸けで報道されて大変なことだと思います

が、収まったあと、街は瓦礫の山で、死屍累々で、疫病がはやって、大変なことになる。農業生産は低迷します。今日ですと、ＮＰＯの援助など様々な国際的支援などもあって、戦争の二次災害をある程度は減らせる場合もありますが、それでも大変なことにかわりはありません。アフガンなどに行ったら大変なことだろうと思いますが、そういう国際的援助システムのない世界で、戦争が原因となって社会のインフラが壊されますと、それによって発生する被害者の数のほうが、戦争そのものの犠牲をはるかに上回るようになっても不思議はありません。

ヨーロッパや中国史を読むとわかりやすいのですが、戦争というのはまず略奪戦になっていまして、戦争をやるよりも物を盗む、あるいは人をかどわかすことに主たるエネルギーが割かれるようになります。とくに広域長期戦になって補給が困難になったり、文化や宗教などの基本的な部分が異なる外敵との戦争になりますと、略奪も徹底します。たとえば日本が第二次世界大戦の末期にロシアでやられたことを思い浮かべればわかりやすいでしょう。歴史をさかのぼって考えれば、もし蒙古が鎌倉日本を打ち負かしていたら、相当激しい略奪や収奪が行われたと思います。たとえば、農業社会で翌年の種籾までごっそり奪われてしまえば、地域が受ける打撃も破壊的になるわけです。それが避けられたのは、結局のところ、大陸から相当離れた島国だという地政学的な条件でした。苦しんだ鎌倉武士には申し訳ない後知恵になりますが、蒙古襲来も日本を近世社会に押しやる「程よい外圧」の一つだと言えると思います。

ですから、戦争というのはたいへん困るものなのですが、マクファーレンに言わせると、日本やイギリスの場合は、国内で内戦をやるのだけれども、勝ったほうはそのあと自分が支配者になるわけで、人民をひどく疲弊させたり、生産基盤をつぶしちゃったら困るので、戦争そのものに消極的になり、戦争に伴う破壊や略奪が抑えられて、あまり深刻なことになりにくい。他方、島国なので異人種・異文化の侵略は比較的少なくなる。これがイングランドと日本に共通の特徴なのだと言っているわけですが、私も大筋、賛成できるように思います。

これとは対照的なのが中国の場合でして、中国五千年の歴史と言いますけれども、秦の始皇帝が即位した紀元前二

二一年から中華民国成立の一九二〇年までの二一四〇年間に、大規模な内乱だけで百六十回程度起こっているそうです。交通事故と違いますから、一回起こると何年か続くという場合もあって、この二一四〇年間に大規模な内乱が持続した期間が九〇〇年に及ぶとも言います。つまり、三年に一回以上の頻度で、中国のどこかで大規模な内乱が起こっていて、そのときに徹底した破壊、略奪が行われ、そのあと飢饉、疫病などが蔓延するわけです。今日ですら中国は正確な人口統計がないのですが、まして当時のことですからわかりませんが、一説によると、ひどい場合には人口が一気に数十パーセント減るということも起こるのだそうです。

こういうことから見ますと、今日ではどうかよくわかりませんが、かつての中国に住んでいたら非常に大変だろうということは想像がつくわけです。ですから、中国の民衆にとって支配者というのは泥棒にすぎないとよく言われます。そこまで言わなくても、王朝が替わるたびに内乱が起こって、内乱のたびに略奪が起こり、そして、疫病がはやり、飢餓が蔓延するということが起こるわけです。こういう社会では、支配する側と支配される側が相互に信頼する、信用の先貸しをするというのは困難で、関係がえらく冷え切って断絶してしまいます。支配するほうは、いつひっくり返されるかわからないから、ひっくり返されるまでは徹底的に収奪し、蓄財する、できるかぎりいい目を見る、そして自分たちの仲間で集めたものを山分けするということになります。支配されるほうはできるだけ取られまいというのが生活上の基本的な知恵になる。

こういう社会では、統治するほうとされるほうが、お互いに信用して、ある程度任せるよということが、非常にやりにくくなります。3の(イ)から(キ)に紹介いたしましたのは、多かれ少なかれこの点に関係しておりまして、時代も立場も異なった人たちがほとんど異口同音に同じことをいわれているのがお分かりいただけると思います。これでは近代国家の建設などとてもおぼつかないことになってしまうわけですし、共産党一党独裁による以外、なかなか対応が難しかったのかもしれないと感じます。

たとえば(オ)は、マックス・ウェーバーというたいへん有名なドイツの学者の議論でして、中国についてこう言っています。「ある男が他人に家を売ったが、しばらくして買い手のところにやってきて、その後自分は貧乏になったから、その家に入りたいと頼む。もし買い手が同胞扶助という中国古代の掟を無視すればたたりがある。そこで貧乏した売り手は『拒めない借家人』として、家賃も払わずふたたびその家に移ることになる。さてかくのごとき法律をもってしては、とうてい資本主義は経済を行うことはできない」。これが中国についてのウェーバーの考えです。

ウェーバーのような歴史の解釈がいつも妥当かどうかというのは話は別にしまして、ここではたいへんおもしろいことを言っていると思います。私が貧乏で、やむをえず家をある人に売ったけれども、金を使い果たしてしまった。そのあと、売った自分の家に行ったら知らない人が住んでいた。売ったんだけれども、いま貧乏をしているからまたもとの家に入りたいと言ったら、中国では拒めない。そういうのを無料で住まわせなければならないような社会で、資本主義経済が成り立つだろうかというのが、ウェーバーの言っていることです。

では、一体なぜ拒めないのでしょうか。実はこれに似た考え方は日本にも長くあったようでして、戦国時代にも見られたと言われます。徳政令とか徳政一揆と呼ばれるものは、その根底で、古い債務をちゃらにし、元に戻すという考え方とつながっているようです。ところが、江戸時代になりますと、このような考え方が、完全に姿を消すわけではありませんが、急激に衰退していきます。他方、中国では日本よりも後々まで根強く残るように思われます。なぜこのような違いが生まれたのか、それは次の(カ)に引用しました溝口雄三さんのご議論とも関係してまいります。

そこに引用しましたのとは別に、日本の公と中国の公の違いについても興味深い指摘をされています。つまり、中国の公はつながりの公だと言われます。ちょっと難しいのですが、人間がつながっているという意味です。これにたいして、日本の公は領域の公だと言われます。これもちょっと説明が必要なのですが、日本では古くから公私の別をはっきりさせるということを言います。近年、公私の別をはっきりさせない人が増えてきているんじゃないかという

説もありますが、それはともかくとして、社会の原則としては公私の別をはっきりさせることが美徳で、基本的な倫理だとわれわれは考えております。この場合は、公という時・場所と私という時・場所が別にあって、分かれているという意識です。中国の場合は、公というのはつながりで、つながっている人々の間、関係者の間で公平、適切にものを分ける、共有する。これが中国の公なのだと言われているわけです。

これは日本語の中にもありまして、公平に配分するというときの公は関係者の間の公正な配分というのにかかわっています。もちろん日本は最初、中国からそういう概念を導入したから、不思議ではありません。ただ、日本の場合はだんだん、実は江戸時代がたいへん大きいのですが、公私の別というふうに切れていく。ところが、中国では公はずっと一貫してつながりの公である。具体的にはどういうことを意味しているかといいますと、たとえば小泉さんから私のところに電話があって、来週から財務大臣を務めてほしいという話が来たとします。そうすると、中国では、私の知り合い、一家眷属がいっせいに私のところにつめかけて来て、あなたが大臣になるなら、あそこのポストに就けてほしいとか、こういう利権を紹介してくれないとか、それまで若干でもつながりのあった人はみんな利益分譲の要求にやってくるというのです。もちろん日本でもそういうことがないとは言えませんし、どこの国でもそういうことは起こるでしょう。ところが日本の場合は、そういうことで依頼に応じるのは公私のけじめ、公私の別に反すると言って断ることができますし、断るべきだとされています。

ところが、溝口さんによりますと、中国ではそういう場合に断るのは、公に反するわけです。公というのは、関係者で公平に分けることですから、分ける義務を怠るとはなにごとか、ろくでもない人間だ、実に公のない人間だということで非難されるのだそうです。こういうのがなぜ出てくるのだろうかというと、支配者は支配者で人民と切れて、自分たちの特権を守る。支配されているわれわれのほうはわれわれのほうで、自分たちの中で利益を守る。自分たちの中で利益を分け合う。そういう構造になっているからなのだと普通言われております。それだけで説明できるかど

うかはともかく、なんでそういう状態が中国で強くなるかというと、先ほど言いましたように、中国が内乱と内戦、飢餓と疫病を繰り返し、支配者は敵だという世界に長く住み、自分らの利益は自分らで護り、分ける、という意識になりやすいのと関係があるのだろうと思います。

溝口さんはそういうことを前提にされて、「中国では……一般に国は朝廷をさし、国と民とは時に利害相反するものとさえ観念されてきた。ある王朝＝国が滅びても新しい王朝＝国がそれと交代するだけのことで、国の存亡にはかかわらない。すなわち『亡国あるも亡種なし』」というふうに中国のことわざを踏まえて言われています。

勝海舟に同じことを言わせると、㈦のようになります。長々とウェーバーやら溝口さんを引っ張ったあとで㈦を読んでいただくと、なかなか味わいがあります。㈦は勝海舟の『氷川清話』で、日清戦争のときに勝が話した記録です。

「日本は立派な国だけれども、支那は国家ではない。あれはただの人民の社会だ……一国の天子を差配人同様に見ているヨ」。差配人というのは、いまでは説明が必要になったのかもしれませんが、借家人に対して地主の代理で苦情を受け付けたり家賃を取ったりするわけです。「差配人同様に見ているヨ。地主にさへ損害がなければ、差配人はいくら代わってもすこしも構わないの……国の戦争をするには、きわめて不便な国だ……日本人もあまり戦争に勝った」うんぬんと。要するに、中国の人々は支配者を体のいい使用人ぐらいにしか見てない。そして、あまり信用していない。代わったってかまわないと思っている。それは中国の歴史と関係があるのだろうということです。

すこし脱線になりますが、私どもが若い頃はいわゆる近代化論とか市民社会論という議論が大変盛んでして、そのとき聞いた話では、ヨーロッパの都市には城壁がある。市民たちはその城壁によって外敵から守られている。つまり、市民と支配者が一体となったといいますか、市民が自ら守る市民社会なのだ。だから、ヨーロッパの町には城壁があるだろう。日本に城壁がないのは、そういう市民社会の精神がないからだという説明をされる先生がおられました。そのとき聞いておかしいなと思ったのは、中国の町も全部城壁があるわけです。日本の古い時代のことは良く分から

ないのですが、中国のほうでは秦・漢の時代から、日本列島の人間は城壁のないところに住んでいる、日本は野蛮な国だ、それが証拠に町に城壁がないなどと考えていたようです。そうすると、中国は秦・漢の時代から市民社会だったのかということになって、これはすこしおかしい。そうでなくて、一つには戦争の形態が関係してくるのだと思います。戦争が徹底的な相互略奪になりますと、ともかく命と財産を持って逃げ出さなければならない。どこかへ逃げ込まなければならない。逃げ込む施設が必要だ。それで、ヨーロッパ大陸でも中国でも城塞式の都市が発達するわけです（日本でも戦国時代には、中国やヨーロッパと同様、住民が逃げ込むことを前提にした築城が広がっていた事情が、近年確認されるようになっています）。

では、日本でも略奪とか人質とかいったことが全くなかったのかというと必ずしもそうは言えません。マクファーレンさんは大筋では正しいと思いますが、日本でたとえば中世の後期から戦国時代にかけての戦争では相当略奪があったようです。優れた中世研究者として知られた藤木久志さんという方が書かれた『雑兵たちの戦場』という本にその詳細が紹介されています。この本のなかで中世から戦国時代にかけての戦争で、傭兵を中心にした下級の侍たちが戦場へ出ていって、女子供やら物やらを略奪していたか、そうやって分捕った女性や子供、あるいは若い男を九州から外国へ奴隷として売り払っていたかという思いがけない指摘がなされています。たとえば、当時の平戸が世界に知られた奴隷の輸出港だったという話などはとりわけ驚きです。そこからもわかりますように、単に島国だったから、ある種の限定された戦争、マクファーレンによると、ゲーム戦略のような戦争にいつも終わったわけではないと思います。大筋は島国という大きい条件が戦争形態に影響を与えたとは言えるにしても、戦国時代のようにヨーロッパ、中国に似たような状況はやはり日本でも起こったわけです。

それでもう一度、幕末、戊辰戦争に戻ります。当時の徳川も薩長側も、幕末を一種の戦国時代再来だという考え方をしたようです。たとえば長州藩なんかは、関が原の恨みを忘れるなと言って戊辰戦争を戦ったそうです。つまり、

関が原の敗北の結果、長州はこてんぱにやり込められたので、そのときの恨みを今度こそ晴らそうというのです。二百数十年たっても、そのときに恨みを忘れず、ことあげに及ぶというのは、考えようでは見上げた覚悟ですけれども、ともかく戦国が再来するかもしれないという意識があったのは、これからも推測できます。ところが現実の戦争は、戦国状況には全くなりませんでした。戦国的な略奪戦争になっていたら悲劇的だったでしょうが、それが避けられたのは、戦国と明治の間に江戸の二世紀半がはさまっていたからだと思います。江戸というものが革命が滑るのを抑えたたいへん大きい役割を果たしたと考えます。

四、江戸体制と「武装解除」

申し訳ないことに前置きが長くなり、ようやく本論に入って、今度は4に移ります。なぜ、江戸があったから戊辰戦争を含めた維新革命が滑らなかったのか。非常に単純化して説明いたしますと、江戸二五〇年かかって、かつての戦闘者だった武士を役人にしてしまったからだということになると思います。役人という以上、役所、勤め先がないと成り立たちません。役所が行革で廃止されて、新しい役所ができたら、その役所で雇ってくれるなら雇っていただきたい。それが役人というものであります。江戸体制が始まったとき、武士は主として戦闘者でありましたが、二五〇年かかって、大方の武士を役人にしてしまいます。とりわけ重要なのは江戸の政府であります。江戸の政府は幕臣の役人化を徹底的に推し進めた政府でした。ただし、上級の旗本、千石、三千石といった高禄で名門のお旗本はあまり役人化しません。このような家柄の人々は、あくせくして役人にならなくても、いちおう食えるし、幅も利くわけです。大いに役人化したのは、主に数百石以下の下級旗本や御家人と呼ばれる下級幕臣たちで、これが人数の上では圧倒的多数派でした。

将軍に公式に拝謁できるのが旗本、いわゆる御目見以上で、将軍に公式に拝謁できないのが以下、御家人であります。この御家人が江戸の政府に雇用されている人だけで、幕末には三万近くいたと思われます。こういう御家人や下級旗本にとって最大の願いは役所で出世すること、出世して御家人は旗本になること、下級旗本は上級旗本になることでした。このように役人としての出世を望む人々の数や範囲がぐんと増えるのが江戸の後半期の特徴の一つになります。「寛政の改革」という言葉をお聞きになった方も多いと思いますが、そういう人々が学問をして出世できるような道をさらに広げたのが寛政の改革の一つの意味でした。ですから、ますます多くの下級旗本、御家人たちが、勉強して出世したいという気持ちを強めるようになります。江戸の政府がひっくり返って明治政府ができたら、こういう人々のなかから、今度は明治政府へ出て、大いに働いて出世したいという人々が数多く現れるのも当然の成り行きでした。他方、人材不足の明治政府は、各藩閥が相互に人材獲得競争にしのぎを削ったこともあって、それに積極的に応じたわけです。

先ほどの榎本武揚ですが、榎本が五稜郭で戦って負けて捕虜になって、東京に送られてきます。その助命運動を福沢がやります。これに薩摩の黒田がこたえて、榎本は助かるわけですが、その榎本の救出運動をやっているときに、福沢が遠縁にあたる奥さんに、榎本のことについてこう言ったと言われています。いまおれは、牢屋にいて明日をも知れない榎本を助けようと思っている。榎本を助けるのはいいんだけれども、「元来、榎本という男は……出身が幕府の御家人だから殿様好きだ。今こそ牢屋に入っているけれども……後日役人になるかも知れぬ。その時は例の通り殿様風でぴんぴんするようなことがあるかも知れない」。そうなったときに、いやなやつだとか、恩を知らないやつだとか言ってはならない。もし言うようなことになるなら、榎本は助けないが、そういうことは言わないかと奥さんに迫って、奥さんも約束したので、榎本救出を続けたという話が『福翁自伝』の中に出てきます。

おもしろいのは、出が御家人だからと書いてある点です。これが上級旗本だとあまりこうならないんです。詳しい

話は省略しますが、上級旗本はプライドが高いし、その割りに役人としての経験・技能には乏しい。新政府からみても人材としての魅力は乏しいし、採用しても処遇に困る。ところが御家人は、下積みで苦労してきた経験はあるし、実務能力にも恵まれている、その上、出世して何々守と呼ばれたいという意欲も強い。それが殿様好きの意味で、江戸政府の場合、だいたい奉行クラスに上ると、従五位下になり、何々守と呼ばれるようになります。要するに、下級旗本や御家人にとって役所で出世して、いまで言いますと、局長、次官クラスまで行って、何々守と呼ばれてみたい。これが一生の願望なわけです。榎本はその代表的存在だから、いまは救ってやっても、そのうち明治政府に出て、出世して威張るようになるにちがいない、そのときに文句を言うなよと奥さんに念を押したという話です。

江戸政府の実務官僚・役人がすべて榎本のように新政府に尻尾を振ったわけではありませんし、上級旗本の多くも、実にだらしなく新政府に降伏したのも事実でして、実態はかなり複雑なのですが、少なくとも新政府が役人としての能力に目をつけ、旧幕臣の再雇用に積極的というか寛大だったのは否定できません。その点、明治政府はわりあい偉かったと思います。革命が滑らなかった、ごちゃごちゃしなかった、一つのたいへん大きい理由もここにあり、牧野も言っているように、この点では明治政府の配慮も認めるべきだと思います。しかし、旧体制官僚の再雇用は必ずしも日本に限ったことではありませんから、これだけでは革命が滑らなかったことを説明するのは難しいでしょう。

では、これ以外になにか幕末日本に特有の事情があったのでしょうか。実は『江戸は夢か』という本の中ですでに書かせていただいた話なので、繰り返しになって恐縮ですが、江戸日本の統治構造の作りかたが関係するように思います。戦国時代の後を受けた江戸時代の非常に大きな特徴は、土地の所有と政治支配を切り離したところにあります。ヨーロッパ、とりわけイギリスの貴族制の研究を若い頃にやっていまして、その点が基本的に違っていることに気づきまして、土地所有問題を中心に英国歴史をあれこれ調べたことがあります。簡単に申し上げれば、日本では武士階層が政治的権力者なのですが、土地は所有していません、土地を所有しているのは農民・百姓でした。ですから土地

所有と支配権力とが分離していることが基本的な特徴でして、土地所有のうえに貴族・統治層の支配が成り立っているヨーロッパとは基本から違っているわけです。統治が土地所有という基盤の上に成立している場合には、革命を起こして権力者である貴族を否定し、追い出しますと、土地の没収という問題がどうしても出てこざるをえないわけです。広大な土地や所領の上に権力がのっていますから、権力を動かしますと、土地所有秩序、ひいては広く社会経済秩序全体にも響いてきてしまうことになります。

フランス革命の歴史をお読みになった方はご存じだと思いますが、革命で貴族たちは所領を没収されます。十七世紀のイギリスの内乱、いわゆるピューリタン革命が私の研究テーマの一つだったのですが、この場合にも王党派貴族の土地が多量に没収されています。つまり、政治革命をやると、土地所有を通って社会の経済システム、さらには社会秩序全体にも影響は及んでいきます。政治の変革が政権移動だけで終わらず、財産秩序や経済全体に必然的に波及するような仕組みが、ヨーロッパ社会に共通する特徴になっています。これがヨーロッパにおける土地貴族制と呼ばれるものと革命との基本的な関係です。エドマンド・バークという、フランス革命当時に活躍したイギリスの保守的な政治家・思想家がいますが、そのバークが「革命は没収の好機である」と言っているのも、私的所有の根絶を掲げたマルクスが出てくるのも、このような事情を背景にしています。

ところが、江戸は二百五十年かけて武士を、当時の言葉でいいますと、鉢植えにしてしまって、土地と切断してしまったわけです。武士は土地を持っておりません。それが証拠に、明治維新のときには、城下の屋敷地を除いて、土地を取られた武士はいません。土地を取られる武士がいないのは当然でして、武士は最初から言うに足る土地を持っていませんでした。日本では、支配と土地所有とが切れていたため、明治維新では、政治権力の返上だけで済むわけです。財産秩序・経済システムに変動は起きないのです。ですから、革命が起こっても、社会のほうは比較的平静を保ち、広く波及することはないわけです。

明治維新で土地を失った農民もおりません。その間に税金問題に困って売ってしまったという人はかなりいたと思いますが、権力移動にともなう没収で土地を失った百姓なんて一人もおりません。普通、明治政府は近代的所有権を導入したといわれます。法形式的にはそうもいえますが、実際は以前から農民・百姓が所有していた土地を、あなたが所有していることを確認しますと、政府が追認しただけの話だと言ってよろしいと思います。明治維新で武士が失ったものは支配権です。あるいは、役所とそのポストであります。江戸体制のもとで、農町民は政治権力と切れていましたから、失うものがありません。言ってしまえば、役所とそのポストを入れ換えるだけで、政治権力の移動が終わってしまうという構造が、江戸ですでに準備されていたわけです。ですから、明治維新が武力で政治権力の移動が起こっても、社会や経済には大規模で深刻な変動は起きないのも自然でした。これが明治維新の「革命」が滑らなかったもう一つの事情でして、それこそが江戸が準備した最大の遺産と言えば言えると思います。

五、江戸の悲願と退場

もう一つ、これとの関連で申し上げたいと思ったのですが、ついに申し上げられないので、たいへん申し訳ございませんが、急いで最後の話にまいります。5の話です。こうやって土地に根づかない、土地とは切り離された政治権力を江戸の政府が大政奉還という形をとって明治政府に引き渡すわけですが、明治政府に引き渡したときの幕臣たちは一体どういう気持ちだったろうかを少し考えてみたいと思います。

旧政府首脳からみれば、政治権力を明治政府に引き渡すのは、武力で倒されたからというより、自分たちが公（おおやけ）というものの職務を十分に果たし得なかったからだという風に考えていました。ですから、政権返上を受けた明治政府は、自分たち以上に政治権力を公平・適切に運用する責務があるというふうに期待し、無言のうちにそう

した政治的圧力をかけていたと思います。

たとえば福沢がそうであります。たとえば勝がそうであります。彼らは、明治の政治史の表で、それほど目立った活動をしたわけではありませんが、政府に対して常々、明治政府が徳川から奪った政権を自分たちのものにしないで、公（おおやけ）のものとして運営するよう、間接的に様々な圧力をかけていたのだろうと思います。これは福沢や勝の行動を見ていると推測できるわけですが、勝と福沢はその点、よく似ていたと思います。ともかく、ここでも日本の「公」の意識が効いてくるわけです。明治政府をして江戸の政府がやるべくしてやれなかったことをやっていただく。そのかぎりで恭順の姿勢を維持し、協力すべきかぎりは協力もする。その代わり、明治政府が自分たちの私利私欲で政権を動かすようなことがあったら、俄然批判し、勝の脅かしですが、最後は一矢報いるぐらいのことをやってもいいと考えていたようです。条約改正問題で、政府は何度も苦境にたたされますが、旧幕臣のなかでこれ幸いと反政府活動や政府転覆に動く者がほとんど出なかったのは象徴的です。批判を内心に押さえ込んで見守る、そんな姿勢と無言の圧力が、革命政権にありがちな専制というものに政府がのめりこんでいくのを抑止する、一つのたいへん大きい歯止めになったろうと私は思っています。

ただし、福沢と勝には違いもあります。福沢にとって、江戸の政府から引き継ぎ、明治政府が付託された義務は、日本にヨーロッパ流の近代国家をつくることだったと思われます。ヨーロッパ流の近代国家をつくることが、明治政府の江戸から申し送りの、江戸ではできなくて、明治政府がやるべき仕事であると思っていたようであります。したがって、日本が日清戦争に勝ったときには—勝つために個人的にも非常に努力をしていますが—手放しで喜んでいます。日清戦争が終わったあとの明治三十一年に完成した『福翁自伝』の中で、「日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも有り難いとも言いようがない。命あればこそコンナことを見聞するのだ……先に死んだ同志の朋友が不幸だ、アア見せてやりたいと、毎度私は泣きました」と。これは福沢にしてはえらいセンチメンタルなものの言いようでして、

福沢にとっていかに日清戦争勝利というのは大きかったか、つまり、日清戦争で福沢の悲願、江戸の政府から持ち越しの悲願、日本を近代国家にするという悲願が達成された感激の大きさを伝えるものでしょう（近代国家とは何か、議論すれば複雑ですが、十九世紀欧米で発達した近代戦争を遂行できる能力は必要条件でした）。福沢はこれを書いたあと二年で亡くなります。その意味では、日清戦争を通して江戸から持ち越しの江戸政府がやれなかった悲願を明治政府が達成した。そう思って、福沢は泣いて喜んだのだろうと思います。

もう一人、勝です。同じ幕臣ですが、勝の場合はもうすこし複雑だったのではないかと思います。それに簡単に言及して話を終わらせていただきます。

「おれは御維新の時に、三十年の間は眼の玉を黒くして政府を監視すべしと約束したが、三十年と言うも早いもので、もう来年が三十年だヨ」と『氷川清話』の中で語っています。これは具体的に何を意味しているのでしょうか。たぶん、勝も福沢と同じように、明治政府は江戸政府ができなかった課題を達成する義務を負っている、それを果たさせるため自分は明治政府を監視するということだったのでしょう。実際に、大久保とか木戸とか岩倉とかいった人々に、自分がこれから三十年間、明治政府を監視するつもりだと言ったというか、脅したことがあったのではなかろうかと想像します、証拠はありませんけれども。早いもので、それからもう三十年たったし、日清戦争の勝利で一区切りついた。これで監視する約束も一応果たしたというのでしょう。

けれども、勝は日清戦争に反対でした。日清戦争はよくない戦争だと思っていたようです。明治政府に江戸政府から引き継がれたものの中には、中国との協力という問題があるのだというのが勝の考えであり、もっと言えば、中国や朝鮮半島には日本のような近代国家はそもそも体質上無理なのだから、福沢のようにそう頑張ってはいかんという考えもあったのでしょう。その点で、福沢の脱亜入欧や戦勝に浮かれる明治政府に、若干の不安を勝は残していたように思います。

ただこれとは別に、勝には勝の悲願達成はやはりあったと思うのです。この話の翌々年、明治三十一年だったと思いますが、ずっと静岡に引っ込んでいた最後の将軍、十五代将軍徳川慶喜、かつて最大の朝敵だった慶喜が皇居に参内して、天皇、皇后と親しく話をするということがあります。これを見て、勝はいろいろな意味で不安を残しながらも、自分の課題、徳川の勢力をまとめて明治政府に協力し、無用な抵抗は一切させないという努力が実ったと考えたのでしょう。それを最終的に象徴するのが、徳川慶喜の皇居、旧江戸城参内で、その点はもって瞑すべしだと思ったのではなかろうかと思います。

最後は急ぎまして話の筋が通りにくいところもあり、全体としてもたいへん雑駁な話で、お聞き苦しく、ご理解していただきにくかったと思いますが、長い間、静かにお聞きいただき、お礼申し上げます。

講演資料（公開学術講演会・平成十四年十月二十六日）

明治という時代

――江戸の悲願と明治政府――

國學院大學　水谷三公

はじめに

三〇年、一五〇年、三〇〇年、四〇〇年

1　維新と滑らなかった「革命」

・富田鐵之助の判断
・B・ムーアのご託宣
・福沢諭吉の皮肉
・牧野伸顕の注文

2　国際環境

・自制と幸運
・ほどよいガイアツ

3　島国の戦争と政治

・島国の地政学
・中国と日本――公と国家・国民
・戦国と明治の間

4　江戸体制と「武装解除」

・下級士族と出世
・民度と合意の支配――一揆とゲーム
・所有と帰属　預かり物思想

5　江戸の悲願と退場

・福沢と日清戦争
・勝と徳川慶喜参内

〈幕末・明治在世略記〉

姓名	生年	維新	死去
勝　海舟	一八二三　文政六年	四十五歳	明治三十二年
西郷　隆盛	一八二七　文政十年		明治十年
大久保利通	一八三〇　天保元年	三十八歳	明治十一年
孝明天皇	一八三一　天保二年		慶応二年
木戸　孝允	一八三三　天保四年		明治十年

福沢　諭吉　一八三四　天保五年　三十四歳　明治三十三年
富田鐵之助　一八三五　天保六年
徳川　慶喜　一八三七　天保八年　三十一歳
伊藤　博文　一八四一　天保十二年
E・サトウ　一八四三　天保十四年
明治天皇　一八五二　嘉永五年　十六歳
牧野　伸顕　一八六一　文久元年　大久保利通次男

〈参　照〉

1　維新と滑らなかった「革命」

(ア)「皇国内一ト先戦地に陥り候上ならてハ　弊事之改正より善美を蓋し候事ニ者相至リ申間敷」――慶応四年正月二十六日（一八六八年二月二十九日）大童信太夫宛て富田書簡（吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁――富田鐵之助傳』より引用）。

(イ)「維新の原動力として働いたものは言うまでもなく兵力である。それが一つのレボリュウションを仕遂げた」池辺三山――「大久保利通論」『明治維新三大政治家』。

(ウ)「日本の政治・社会制度が資本主義の諸原則に適応できたため、日本が近代に突入する際に、革命という犠牲を払わないですんだ。日本がこの初期の恐怖を免れたことが一因となって、日本は後にファシズムと敗戦とによって打ちのめされることになった……革命を回避して近代に入る代償は、きわめて高くつく」――B・ムーア『独裁と民主政治の社会的起源』。

(エ)「古来各国の革命に、一旦その国を平治しても、先代の与党は容易に消滅せずして再挙を謀らざるはなし……然るに維新の政府は、数ヶ月の間に天下を平治して、徳川三百年の政権を奪却したれども、幕府恩顧の士民多き其中に、旧政府の為めにとて嘗て一夫の再挙を企てたる者もなきのみか、陰にも陽にも之を談じたる者さへあるを聞かず。一気呵成の新政府を視る

こと、百年来の習慣に慣れたるものの如し。奇なりと云うべし」――「維新以来の政界の大勢」明治二十七年三月（『福沢諭吉選集』第六巻）。

(オ)「幕府の与党とか、徳川方の潜伏せる不平分子の行動は函館戦争で根絶し……その後幕府側の旧勢力は明治政府に何の煩いもかけなかった。これは勝らの進言に基づく徳川の慎重な態度、また新政府の当局者の思慮ある取り扱い方にもよるのであるが……歴史家が当時の史実の研究を遂げて、正確に後世に伝うべきことだと思う」牧野伸顕『回顧録』。

3　島国の戦争と政治

(ア)「戦争は通例、農業や社会の破壊とそれに続く飢饉と疫病によって、直接の戦闘によるよりもはるかに多くの人間を死に至らしめる」。ところが日本と英国では、こうした戦争自体が少なく、発生した戦争も、宗教などを同じくする人間同士の戦いで、穀物や動物の大々的な破壊や略奪にいたることは稀だった。獲得すべき物は権力であって、略奪品にはない。支配者になろうとする者は、将来の臣民を滅ぼすことに利益を持たない。両国の戦争は、実際被害を与えないような戦略ゲームである。イングランドと日本に重大な戦争がなかったことは、両国の特異な発展の中心的理由であり、それは島国という偶発的事情による――A・マクファーレン『イギリスと日本――マルサスの罠から近代への跳躍』。

(イ)「清国の改革は絶望的で、国民に愛国心はなく、政府組織は完全に腐敗している。それとは反対に日本人は忠誠心旺盛で戦闘力に優れ、最小の装備と食料で戦いを遂行する能力がある」（『アーネスト・サトウ公使日記』明治二十八年九月二十日）

(ウ)「満清政府をあのままに存しておいて、シナ人を文明開化に導くなんということはコリャ真実無益な話だ……何はともあれ、試みに中央政府を潰すより外に妙策はなかろう。これを潰して果たして日本の王政維新のように旨く参るかどうか、きっと請け合いは難けれど、一国独立のためとあれば、試みにも政府を倒すに会釈はあるまい」――『福翁自伝』。

(エ)「日本は立派な国だけれども、支那は国家ではない。あれはただ人民の社会だ……一国の天子を、差配人同様に見ているヨ。地主にさへ損害がなければ、差配人はいくら代わっても少しも構わないのだ……国の戦争をするには、きわめて不便な国だ

……日本人もあまり戦争に勝ったなどと威張っていると、後で大変な目にあふよ。剣や鉄砲の戦争には勝っても、経済上の戦争に負けると、国は仕方なくなるよ。そして、この経済上の戦争にかけては、日本人は、とても支那人には及ばないだろうと思ふと、おれはひそかに心配するよ」――『氷川清話』。

(オ)「ある男が他人に家を売ったが、しばらくして買い手のところにやってきて、その後貧乏になったから、その家に入りたいと頼む。もし買い手が同胞扶助という中国古代の掟を無視すればたたりがある。そこで貧乏した売り手は『拒めない借家人』として、家賃も払わずふたたびその家に移ることになる。さてかくのごとき法律をもってしては、とうてい資本主義は経済を行うことはできない」――M・ウェーバー『一般社会経済史要論』。

(カ)「中国では……一般に国は朝廷をさし、国と民とは時に利害相反するものとさえ観念されてきた。ある王朝＝国が亡びても新しい王朝＝国がそれと交代するだけのことで、国の存亡にはかかわらない。すなわち『亡国あるも亡種なし』であ」る――溝口雄三『方法としての中国』。

(キ)「君子のような政治的地位を有する上層階級の者のみが人間であるとし、禽獣のごとき庶民は殆ど思慮の外におかれる……今日の人民共和国にも脈々と受け継がれている中国人のエトス」――古田博司『東アジアの思想風景』。

4　江戸体制と「武装解除」

(ア)「元来榎本という男は……出身（ヂ）が幕府の御家人だからお殿様好きだ、今こそ牢屋に入っているけれども……後日役人になるかも知れぬ、その時は例の通り殿様風でぴんぴんするようなことがあるかも知れない……」――『福翁自伝』。

(イ)「革命は没収の好機である」――E・バーク『フランス革命の省察』。

(ウ)「ヨーロッパでは貴族支配階級が大規模に土地を所有し、その所有の上に自分達の権力と威信を維持してきました……江戸時代の日本では、土地を所有したのは農民や町人で、これら『所有階級』は、少なくとも公式には権力から切られていました……このような世界では『革命』が、あるいは大規模な政治紛争や政治権力の移行が、所有と無関係に起こりうる可能性

が大きいことになります。明治維新も、結局は武士団と武士団との抗争でしたから、家禄を含めて、大筋では所有秩序に影響を与えず、政治権力の移行が起こった一例です」――拙著『江戸は夢か』。

5　江戸の悲願と退場

(ア)「日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも有り難いとも言いようがない。命あればこそコンナことを見聞するのだ……前（サキ）に死んだ同士の朋友が不幸だ、アア見せてやりたいと、毎度私は泣きました」――『福翁自伝』（明治三十一年）。

(イ)「おれは御維新の時に、三十年の間は眼の玉を黒くして政府を監視すべしと約束したが、三十年と言うも早いもので、もう来年が三十年だヨ」――『氷川清話』（勝海舟談話『国民新聞』明治二十九年五月）。